

同じことを思いつづけるのがよい。一つの言葉を、ずっと頂きつづけるのがよい。御信心とは、一生続けて頂いても遂に無くなることのないみ言葉を頂いたのであるともいうことが出来る。一つの言葉をずっと心にかみしめて、一步一步人生の旅を続ける人は、他の人には知れようのない生活経験というものを受け取ることが出来る。

親が旅に出る子に、「人を見たらどろぼうと思えよ」と教えて出すか、あるいは「旅は道づれ、世はなさけ」と教えて、人を見たら親切にせよ、助け助けられてゆくのが人の世だ、人の御恩を忘るなよ、さぎは立つともあとを濁すな、と教えて出すか。前の親は、人を見れば盗人と思えよ、旅の恥はかき捨て、だと、悪を上手にやつてのけることを教える。この一人の人間の行く末を見るがいい。小さい時に植えつけられた根性玉が、小学校、中学校、高等学校、大学と、どこまで行つてもものを言い貫いて、この人間の一生を支配して大した人物にはなりようがない。

高い人格から出た、高い言葉を一生持ちつづけるがいい。「邪見憍慢悪衆生」と仰せになる。人の前に立つて講演するほどの人、即ち教家にしてこのお言葉を知らない人は一人もない。講演にもすれば、これを槌にして人の頭をもたたく。しかし自分の頭が高いことは首千万度聞かされても見えて来ない。一言の中に邪見憍慢のありだけが見えている。そんな邪見な高上りの話は誰も好かない。すると喜んで聞かない罪は大衆の上に被せて「聞く耳など持つてはいないじゃないか」という。自己肯定もここまで来れば、始末がつかぬ。この通りに邪見憍慢悪衆生の一句すらなかなかそれが私のものとはならない。

しかし不思議なもので一句の御法がほんとうにこの人のものになれば、自然に百千の法がその人のものになっている。

「おい君。君は何の為に、壇上に立つて話をするのか、考えて見たことがあるかね。」
「それはわかったことです。」
「どうわかったことかね。言つて見たまえ。」
「それは、自信教人信の為です。我人共にお念仏申させて頂きたいためです。」
「そうだ、そうだ。ようわかつているね、君にも、しかしどうだろう。それなら君の話は大衆にもつとわかるはずじゃ。君の話は、何のことかよくわからぬというぞ、大衆が。もつと大衆にわかるように話したらどうだ。」
「私にはそんな芸は出来ません。人が聞いてくれようが、くれまいが、私は私の深い味を語ればいいのです。」
「そうか、それなら、大衆の前に立たなくてもよい。一人書齋でお聖教を頂いていればいいではないか。人が君の言うことを喜んで聞かぬ原因がわかった。」

誰でもこの世に生れたものは、大経下巻の「本罪」とて、生れながらにして、久遠のみ親に反逆して、不了仏智とか、仏智疑惑とかいわれるところの根本の罪を持つてゐる。これは生れたままで持つてゐるのである。この根本の罪悪、生きてゐる限り誰

でも持つている根本無明が問題にされるのが宗教である。教を説く限り直ちにこの根本の病根に教のメスが入りこんでのみ助けられるのである。善だとか悪だとかにとられ、如何にお念仏の話をして、その心の底には、依然として善悪を言う心のみがあつて人を裁き、又、名利心が根強く巢を造つて、お話をしながら、立派な先生と言われたい、学者と見せかけたいという風な心が一ぱいあつて、話が名利の話となる。それだから、誰が聞いても腹がふくれない、何やら足りないものを感じるのである。

御念仏の世界において、久遠劫来の根本の大問題を解決して下さるのが信心である。この根本の問題を解決して頂いた者が、じつとしていることが出来ないで人に伝えるのが自信教人信である。

仏法に入つて位を得ようと思えば、ある程度の位が得られる。仏法に入つて学者になろうと思えば、それ相当の学者にもなれる。仏法によつて衣食を得ようと思えば、ある程度の衣食も得られる。仏法に入つて我と人との上に真実の自覚や救済を得ようと思えば、まことにこれを得ることが出来る。いつたい仏法者は仏法の大海の中に、何を求めて入ればよいのか。

それは分つたことであるというかも知れぬ。しかし私には、それが根本的な一つの問題で、このことが仏教者となつた最初の日から考えられていたならば、やがてそこには闇の世を照す一本の常夜燈ひつこくとうが生れてはいなかつたらうか。学問も出来たらうし、講演や説教も大家の名を成就したろうけれども、人生最後の日に立つた時、何も無い愚痴のかたまり、救われていない自他のみが死の前に存在するのは、今言つたようにその最初の日に、一生を貫くべき言葉を得ることが出来なかつたのである。

しかし今からでも遅くはない。全我を救いあげて下さる一句の法門を受取つて、聞法精進するがよい。浄土真宗は自然の法則が衆生の上に生きて下さることである。自然の法則が生きて下さるのであるから、衆生にとつてはまことに易行道である。

自信教人信というみ言葉でも、これはまことに善導大師が念仏に救われて、真成報仏恩の大道はこれより他にはない、とお示しになつたものである。そしてそれは、そのまま御開山聖人では、憶念弥陀仏本願、自然即時入必定、唯能常称如来号、応報大悲弘誓恩であつて、如来本願大悲自然の法則が、名号となつて、易行道を展開することを示されたものであつて、ただ南無阿弥陀仏の六字につきる。

この名号六字が、生きたみ親であり、信心であり、行であり、これを称えるままがが自信であり、教人信であり、願作仏心であり、度衆生心であり、仏恩報謝である。南無阿弥陀仏の六字を一生かけて称え続けさせて頂く。その真に出来る人の幸は、なかなか言葉にあらわすことは出来ない。

一生を貫く一つの言葉……

一生を貫く一つの念仏行……

そこに至幸至福の人が存在する。

若き人よこれを思え。